

## 審査の結果の要旨

橋本 雄

本論文は、15世紀を中心とする日本の国際関係についての通説的理解を、《国家》と国境をまたぐ《地域》との共存と対抗という観点から、主として日本側に残された諸史料の徹底的な読み直しを通じて、塗りかえることを試みた意欲的な研究である。

まず序章で、先行研究について、朝鮮・中国の《国家》と《地域》との対抗に注目する余り、日本の中世《国家》が国際関係を規定した側面が見落とされてきた、とその不備を指摘する。そして第一部では、外交権を掌握する室町幕府が明・朝鮮との間に設定した外交システムを詳細に明らかにする。ついで第二部では、《地域》を支える人間結合として対馬・博多連合勢力に着目し、彼らと室町幕府や朝鮮政府との虚々実々のかけひきを浮き彫りにする。

その結果、次のような注目すべき新見解が提示された。

遣明船派遣の国内的契機としては、将軍の代替わりに伴う右大将拝賀が重要であり、そこには代替わりの徳政という性格がある（第II章）。禅宗五山が担った外交文書・外交使節の発遣業務において、対明と対朝鮮とでは、システムのあり方と重要度の認識の双方において、大きな落差があった（第III章）。遣明船の発遣経費の主要部分は、乗り込む商人が支払う荷物運賃でまかなわれていた（第IV章）。日明間で機能した勘合とは、割印を捺した紙面の余白部分に咨文や別幅という外交文書を書き込んだ複合文書である（第V章）。有力守護大名や琉球国王の名義で朝鮮に赴いた使者の大部分は、対馬・博多連合勢力が仕立てた「偽使」であり、朝鮮政府はその資格審査のために牙符や割印によるチェック・システムを設けていた（第VI・VII章）。1493年の政変で将軍権力が二つに分裂し、それぞれが九州の地域権力と結びついて、勘合や牙符という将軍の外交権の徴表を切り売りし、その結果16世紀には地域権力が外交権を掌握する事態が生まれた（第IX・X章）。

本論文の学説史に対する貢献は、つぎの三点に要約できる。

(1) 近年めざましく進展した室町～戦国時代政治史研究の成果を咀嚼し、その上に国際関係を位置づけることにより、国内的および対外的な契機の統一的把握に成功した。

(2) 当該期の国際関係で重要な役割を担う勘合・牙符・割印などについて、史料の徹底的な読み直しを行い、形状・機能・保持者について多くの新知見を示した。

(3) 「偽使」という存在が当該期の国際関係において果たした独特かつ重要な役割を、彼らの流す情報の真偽を慎重に弁別しつつ、《地域》論の立場から鮮明にした。

このように本論文は、日本中世後期の国際関係研究を大きく塗りかえた業績である。措定された《地域》が日朝間の対馬・博多連合勢力のみで物足りないこと、遣明船の経営構造分析における数字の処理に再検討の余地があること、16世紀に訪れる国際関係の新段階については見通しに留まったことなど、不満を感じさせる部分もなくはないが、本論文の意義を損なうほどの弱点ではない。

以上より、本委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい優れた業績として認めるものである。